

令和元年度 事業報告書

文化庁京都移転の機運を醸成するための連続講座

第 9 回 「現代アートと京都」

○実施日 令和元年 6 月 27 日

○会場 京都経済センター（京都市下京区四条通東入函谷鉾町 78 番地）

○出演者

ゲスト；

小崎 哲哉氏（ジャーナリスト／アートプロデューサー）

金氏 徹平氏（現代美術家／京都市立芸術大学美術学部彫刻科准教授）

ファシリテーター；

金島 隆弘氏（アートプロデューサー／芸術学研究員）

第 9 回 文化庁京都移転の機運を醸成するための連続講座

文化庁京都移転の機運を醸成するための連続講座【第9回】
現代アートと京都 CONTEMPORARY ART & KYOTO
第9回講座
2019.6.27 18:30-20:30
【開場18:00】
会場 京都経済センター 6 階会議室 [5-D] (京都市下京区烏丸通西側1丁目入館券券別750円)

本事業は、文化庁の京都への全面的な移転を控え、その進捗や機運について検証し、京都市が引き受けるべき役割を考えるトークシリーズです。今回は「現代アートと京都市」にスポットを当て、日本における文化政策の未来を探ります。

出演者 GUEST
小崎 哲哉氏
【ジャーナリスト／アートプロデューサー】
金氏 徹平氏
【現代美術家／京都市立芸術大学美術学部彫刻科准教授】

ファシリテーター FACILITATOR
金島 隆弘氏
【アートプロデューサー／美術学専攻】

申込方法
申込期間：2019年6月4日(水)～6月18日(木)
申込：TEL 075-661-3755 FAX 075-661-5835
申込先：京都市立芸術大学美術学部彫刻科准教授 金氏 徹平氏
TEL 075-661-5835

アクセス
京都市立芸術大学美術学部彫刻科准教授 金氏 徹平氏
TEL 075-661-5835

令和元年 6 月 27 日 (木)

<ゲスト>

小崎 哲哉 氏

(ジャーナリスト／アートプロデューサー)

金氏 徹平 氏

(現代美術家／京都市立芸術大学美術学部彫刻科准教授)

<ファシリテーター>

金島 隆弘 氏

(アートプロデューサー／芸術学専攻)

金島：ただいま紹介に預かりました金島と申します。本日はよろしくお願いします。

まずトークを始める前に小崎さん、金氏さんから最近の活動について自己紹介をいただきたいと思います。

小崎さんは、先ほどの紹介にもありましたが、現代アートについての本を書かれています。皆さんのお手元にも資料がありますが、最近増刷されたそうですね。現代美術の入門の本として、美術関係者のほかにも、経済界の方やコレクターの方、また、美術に初めて触れてみようとか、美術に興味はあるけれど、どのように買えばいいのかなといった方々に読まれているようです。本の出版の経緯から、自己紹介いただければと思います。よろしくお願いします。



小崎：小崎です。よろしくお願いします。

私は、ご紹介にありましたとおり、今から16年前に「ART iT」という現代アートの雑誌を創刊し、編集長を務めました。季刊雑誌でしたので、6年間、全部で24冊出版しました。またWebサイトも作り上げました。その後、自分で起こした会社を辞め、跡を継いでくださる方に譲り、ちょうど10年前に京都へ移ってきました。それまではずっと東京にいました。

本を出した経緯は…実は頼まれたからなのですが(苦笑)。現代アートってなんだろうと多くの方が疑問に思っていると思います。私は、長くこの業界に携わっていて、自分なりの答えはあったのですが、案外アート業界というのは、よく言えば…よく言えないな。

会場：(笑)

小崎：「閉じている」と言いますか。もう少し強い言葉で言えば、エリートイズムが強すぎるような気がします。

ともかく、「現代アートは非常に難しい。なかなか理解が難しいから、自助努力で行くしかない」と、まるで年金問題のようですが、このように思っている方が結構多いですね。実際に、例えば、いわゆる古い美術と比べると現代アートは、見る側にもある程度の知識を要求するところがあります。でも、それは大したハードルじゃないはずです。なぜなら、私は芸術大学に通ったわけではなく、特にスペシャリストというわけではありません。ただ、なんとなく好きになって、いろいろ見ているうちに、どんどん好きになっていって、楽しくなった。ひるがえって考えてみると、現代アートとは結局こういうことじゃないか、と自分なりに思ったわけです。そのことを書いてある本というのが、案外ありません。少なくとも私がある程度読んだものの中では、英語圏でもそれほどはないし、日本には全く無い。だったら自分で書いてみようかということで、本を書いた次第です。

次に、最近のアートシーンについてです。先ほどお話したように、10年前に東京から京都へ移ってきました。雑誌はその前からやっていましたので、日本のアートシーンについては、もちろん全部とは言いませんが、だいたい承知



しているつもりです。そこで断言できることは、日本のアートは、商業的には東京に一極集中です。いわゆる商業画廊（コ

マーシャルギャラリー）というのは9割が東京にある。

金島：そうですね。

小崎：京都は数え方にもよりますけれど、5本か10本の指で確実に足りてしまう。大阪はもう少し多いかもしれませんが、それでも、とにかく東京の方が圧倒的に多い。

ですが、現代アートの質という観点で言うと、明らかに西高東低だと思います。個人的には、京都は圧倒的に高いと思っていますし、そう思っているアート業界人も多いと思います。

その理由の1つとして、東京が広すぎるということがあります。東京には、東京芸大、多摩美、武蔵美、東京造形大など、美大がたくさんあります。京都にも、金氏さんがいらっしゃる京都市立芸大、私が教えている京都造形大、精華大、嵯峨美、成安など、5つの芸術系大学があり、工繊大のようにデザインや建築を教えているところもありますから、人口比からすれば東京に匹敵するか、もしかするともっと多いかもしれない。そして京都は何より学生に優しい街です。平たく言うと、多少貧乏でも食っていける。楽しく生きていける。

さらに、金氏さんが話してくださると思いますが、京都市立芸大の自由な校風が素晴らしい。一学年の人数が少ないこともあって、京都市立芸大では、学部学科を超えていろんな人と付き合うことができる。さらには学外で、建築・音楽・演劇・ダンスといった全く別のジャンルのことをやっている人たちと一緒に活動できる。学ぶ環境が非常に良いのではないかと思います。そして、教授陣を見ますと、もちろん全員ではありませんが、東京芸大に比べるとはるかに面白い人が多いんですね。この面白い人たちが面白い教育をやっているの、学生が自由に育っている気がします。たぶん芸術大学に限っ

たことではなく、例えば東京大学と京都大学を比べると、京都大学のほうがはるかに自由な校風で、それは輩出したノーベル賞受賞者の数にも現れているとよくいわれます。ただ、最近の京都大学の吉田寮のニュース等を見ますと、その自由度はどうしたのかなとも思います。京大の方がいたら申し訳ありませんが（笑）。

そして、京都には意欲的な芸術機関やアートフェスティバルもたくさんあります。例えば京都芸術センターは多くのジャンルにわたって意義深い活動をしています。それから、KYOTO EXPERIMENT。これは舞台美術のフェスティバルで、金氏さんも何回か出演していらっしゃるんですけども、世界レベルの素晴らしいフェスティバルです。また、今年 7 回目を迎える、KYOTOGRAPHIE という写真を中心に展開しているアートフェスティバルも面白い。今年、金氏さんが京都新聞の地下にある新聞工場跡の空間で素晴らしい展示を見せてくれました。

さらにはアーティスト・イン・レジデンスといって、芸術家がある場所に一定期間暮らして作品を作るという制度がありますが、京都にもその施設がいくつかある。京都芸術センター、フランスが運営しているヴィラ九条山、ドイツのゲーテ・インスティテュートが運営しているヴィラ鴨川など。そういうところで海外のアーティストの方々との交流もできる。

そのほかにも、自然環境が良いですね。さらに自転車ではほとんどの場所へ行けるという交通の便の良さも相まって、特に若いものづくりに携わる人々の間で交流がどんどんと生まれてきている。そこが何よりもいいなと思います。

京都市立芸大の教育について、金氏さんはどう思われますか。

金氏：京都市立芸大は、本当に自由な校風といえますか、小さい大学なので専攻間の交流も活発です。例えば、工芸を勉強していたけれど、

その後、演劇のジャンルで大変有名になった人や、デザインの勉強をしたけれど、アーティストになった人等、ジャンルを超えた活動をしている人もたくさんいます。

小崎：「ダムタイプ」という今や国際的な存在になっているグループがありますね。京都市立芸大の学生が 1984 年に結成したものですが、メンバーのバックグラウンドは、建築、音楽、ダンス等、様々ですね。

金氏：そうですね、高嶺格さんは、漆を専攻していましたが、今はパフォーマンス等多様な美術の活動をしています。また、中心メンバーの一人の小山田徹さんは、大学で日本画を専攻していましたが、4 年間で 1 枚描いたか、描いてないかと聞いています。大学院に進学する際には、「これからも描かないけれど、なんとか大学院に入れて」とお願いしたそうです。結局、京都市立芸大には都合 6 年間通われて、ダムタイプの演劇とパフォーマンスグループの活動をされていましたが、今は彫刻科の教授をしています。

小崎：小山田さんは、キャンパス中に変な小屋をいっぱい作っていらっしゃいますよね。

金氏：そうですね。小山田先生であれば、建てても良いという許可が出ています（苦笑）。また、あまり大きな声では言えませんが、小山田先生がいればどこでも焚き火ができる。

小崎：東京芸大では無理でしょう。

金氏：そうですね。小山田さんは人が集まる場所を作ることが作品になる人ですが、そういう面でもユニークです。

京都市立芸大の彫刻科も特徴があります。ほ

とんどの大学の彫刻科では、何か1つ素材を選ぶとそれを4年間続けます。木を彫るなら、4年間木を彫る。それが普通ですが、私の大学では、基礎課程で木や鉄、粘土をひととおり学びますが、その後は完全に自由です。何をやっても良いというところが特徴で、かなり珍しいやり方です。

小崎：金氏さん自身も、もちろん彫刻は続けておられますが、先ほど話に出た KYOTO EXPERIMENT で発表した作品は、全くのジャンル横断型ですよ。

金氏：そうですね。私は、彫刻という中でも、「コラージュ的な手法」と言っていますが、いろんなもの、素材を組み合わせて作ることを活動としてやっています。

その延長線上として、人と人、技術と技術をつなげるだとか、そういう場としての演劇が面白いなと思います。そんな時に、KYOTO EXPERIMENT という、これまたとても自由で、多様な価値観や視点を持って、世界中から最先端のパフォーマンス作品を集めてくるフェスティバルから呼んでいただいた機会がありました。そのときに音楽をやっている人や、小説を書いている人など、京都にいる多様なジャンルのアーティストを集めてきて演劇作品を作りました。あれも京都だからできたと言えるかもしれません。

小崎：それは間違いないでしょうね。

昨年京都市立芸大の中で、金氏さん、アーティストで先生でもある伊藤存さん、小説家の福永信さん、そしてアーティストの池田剛介さんが、学生を巻き込んで非常に面白いことをされましたよね。ぜひ説明して欲しいのですが、私とその授業でいいなと思った点は、「知性」と「野生」を取り戻す取り組みだったことです。

今、芸術大学の学生は、非常に重要なことが2つ欠けています。1つは「知性」。これは教授陣を含め、我々のような先行世代が全員いけないうのですが、現代アートというのは実は非常に知的な営みです。見るものではなく知性に訴えかけなければならない。そのためには知性を発揮しなければなりません、そこが十分に教えられてこなかった。もう1つ大きく欠けているのは「野生」ですね。数十年前は野生溢れる、もしかしたら野生しかなかったとも言える芸術家がたくさんいました。それが今はどちらもだんだん希薄になっている感じがしています。金氏さんたちの取り組みは、それを両方とも取り戻そうとする試みだったような気がします。

金氏：この授業は総合基礎という授業で、これも京都市立芸大の特徴的な授業です。1年生の最初の半年間は、全部の専攻の学生が同じ授業を受けます。日本画、工芸、デザイン、どの学生も総合芸術という皆で同じ課題をやる授業があります。その授業のグループ制作の課題についてお話します。



タイトルは「モノと占拠」で、「大学の中のあるスペースを10人くらいのグループで占拠しなさい。そこにあるものを使って自分たちの場所を占拠する、自分たちの場所を作りなさい。確保しなさい。」という課題です。どのようにその場所を作れば、自分たちが占拠しているこ

とになるのか。ものの存在感や価値がそこでのように変化してくるのか。またはある場所を占拠することにより、それが他者にどう影響を及ぼすのか。このような実験が大学という守られた空間の中だからこそ、自由にできました。しかも、狭い空間ですので、ぶつかり合いも起きます。そういう意味で、大変ユニークな授業です。

ほかにも、いろんな課題が出てきます。先ほど紹介した小説家の福永さんが文章を考えてくれましたが、学生にTwitterで「今からこういうことをやってください」という指示を流す。先生とは直接話さずに、どんどん授業が進んでいく。Twitterを使うことによって、実際の空間は大学の中だけですが、大学の外ともつながってしまうということが起こります。それによって空間認識や、自分たちの場所はどのように作られるのか、人とどうやって共鳴するのかを扱った授業だったと思います。



授業には先生たちのグループも入って、実際に先生たちもいろんな場所を占拠してみせます。この写真は、私がアーケードの上を占拠したら、大学の職員の方に怒られたところですよ（笑）。アーケードに上がった瞬間に「そこは絶対に上がらないでください」と怒られてしまいました。そうやって率先して怒られていくところも学生に見せていくということですね。

また、行政等の仕組みと自分がやりたいことをどのように擦り合わせていくのか考えてい

くこともとても重要なことだと思います。

金島：実は私も今、京都市立芸大の博士課程におりまして、ちょうどこの授業のときにこの場を見ていました。

私は大学に来る前は、中国や東京のアートフェアの仕事をしていていましたが、この時期に中国、台湾、香港でちょうど「占拠」といた政治的な部分も話題になりました。こういった政治的な要素も、このときの金氏さんの授業のテーマの1つですよ。

金氏：そうですね。モデルになっているのは台湾の学生運動で、学生たちが国会議事堂を占拠していました。

金島：占拠したけれども、傷つけないように占拠していました。

金氏：そうです。その時の特徴だったのが、そこにあるものだけを使っていたことです。ある主張をするために占拠をするのですが、全て元に戻せるようにものや人を扱うことをしていました。例えば社会の中で自分たち主張したいことや、作りたいものを存在させる上で、とても重要な考え方ではないかなと思います。

金島：そういうものの応用が、最近香港でも起こっているのかなと思います。

また、この授業はTwitterを使うことで、外とも繋がりますが、大変プライベートな守られた中でも、現在世界で起こっていることとつながるという授業ですね。

金氏：授業では、この写真のように先生の作品として置いてあるものを勝手に学生が動かして、ロープで縛る例もありました。

小崎：この試みと非常に似ているものが、最近秋田公立美術大学で行われました。「大学の中に限っていたずらを考えて実行しなさい」という課題を出した先生がいたんですが、それが先ほど名前が出たダムタイプのメンバーだった高嶺格さんです。金氏さんの先輩にあたる方ですが、京都市立芸大の試みに触発されて似たようなことをやったのかもしれないですね。

授業では、学生が高嶺さんの車をサランラップでぐるぐる巻きにしたり、学校の中に爆破予告というビラを貼ってまわったりした。ただし、その日付は前日で、すでに過ぎている。とはいえ、さすがに結構揉めたようです。また、大学のキャンパスにある彫刻の首が切られているのを事務局が発見した。そして、「これは常軌を逸している」という抗議文がメールで送られてきて、高嶺さんは青ざめたそうなんです。すべてが課題のいたずらだった、と。なかなか優れた発想が試されていると思います。このような自由な気風・校風が、間違いなく京都市立芸大やその出身者に流れていると思います。

金氏：そうですね。この授業を担当した教員も当てはまりますが、何かプロジェクトをやろうとした時に、いろんなジャンルの人がすぐ集まれるのも、京都市立芸大の大きな特徴です。

先ほども面白いアーティストがたくさん関西にいたという話がありましたが、本当にそうです。発表する場所やギャラリーの数に比べて、ずっと京都に残って世界的に活躍しているアーティストが数多く存在するのは、資源だと思います。

小崎：京都に限らず、注目されて人気作家になった人は、やはり東京に移る方が非常に多いですね。当然、東京にはコマーシャルギャラリーがたくさんありますし、アート関係者が東京に一極集中しているからです。ところが、京都は

なぜかわかりませんが、金氏さんのように人気アーティストになっても京都を選んでずっと住み続けるアーティストが多くいる。

金氏：大変活躍しているアーティストでも、京都と海外のどこかを拠点にしている人もたくさんいますね。

小崎：やはり京都市立芸大出身の名和晃平さんも、向島にある元サンドイッチ工場を改造して「SANDWICH」というアトリエにされています。アート関係者が各国から京都に来ると、ほぼ半分以上がそこを訪れる場所となっています。

金氏：アート関係者はみんな、仕事なくてもやっぱり京都には来たい。日本に来ると、私のところに連絡があって、どこを見に行ったらいいかと聞かれます。でも、常に現代美術のジャンルで面白い展示をしている場所、紹介できる場所がありませんよね。

小崎：それは残念ですね。

金氏：世界中のどこに訪れても、いつ行っても、何かやっているという場所が大抵あります。京都にはそういった場所がないので、アトリエやスタジオを回るという感じになるわけです。

小崎：そうですね。東京であれば、ご存知のとおり、公立でも私立でも新しい美術館がたくさんありますし、人気のあるアーティストを抱えているギャラリーもあるので、どのシーズンに行っても何か必ず見ものがあるわけです。大阪の国立国際美術館はほぼ現代アートに特化して展示をやっていますが、一方、京都の岡崎にある京都国立近代美術館では、年間半分以上がデザインか日本画の展示です。現代アートは年に1回から2回くらいですね。京都市美術館は

3月のリニューアルオープンで、現代アートに特化する旨も聞いています。

金氏：そこは大変期待しているところです。

また京都市立芸大の話で申し訳ありませんが、@KCUA（アクア。京都市立芸大のギャラリー）は頑張っています。堀川御池の角にあるギャラリーです。

京都以外のアート関係者が京都に来たときに見学する場所がなくて、もったいないと思うことが多くあります。昼間はどこに展示見に行ったかいいかと聞かれて、たまたま何かやっていれば案内できますが、やってなければアーティストのスタジオをいくつか回る。夜の見学先は今まではあまり紹介するところがありませんでしたが、最近は「外 soto」を教えてあげるとみんなが喜びます。

小崎：「外 soto」は浄土寺にあります。白川通沿いのビルを改築して、1階をライブハウスにしているんですが、非常に狭く、30〜40人も入ったらいっぱいになる。「空間現代」という東京から移ってきた30代のバンドが作った空間です。これも面白いケースだと思いますが、彼らは東京で活動していて、たまたま「地点」という劇団に出会った。地点も東京で活動していましたが、京都に移ってきて、銀閣寺の近くに自分たちの拠点を作った。空間現代は、その舞台の音楽を手がけることから縁ができたわけですね。そうすると、そこからまたいろんなジャンルの人が集まる。あれも面白いですね。

金氏：あそこも高い頻度で最先端のミュージシャンたちが来ていて、いつ見に行っても面白いです。

小崎：小さいけれども、世界的な取組がなされている感じですね。

金島：私も先週ヨーロッパ出張で、ドイツのベルリンやフィンランドのヘルシンキを回ってきました。ベルリンにはベルリン中央駅の目の前にハンプルク駅現代美術館があって、駅からすぐ近くでかなりのボリュームのドイツの現代美術の作品が一堂に見られました。ヘルシンキは日本でいうと高松くらいの人口ですが、そこでも政府が現代美術の美術館であるキアズマ美術館を作っていて、そこへ行くと、フィンランドの近代以降の美術作品がしっかりと見られる。やはりそういう場所が、京都でも京都市立芸大の移転に合わせてできてくればよいと思います。



金氏：京都市立芸大は2023年に京都駅のすぐ隣に移転することになっています。そこにギャラリー@KCUAも移転します。現在、力を入れて計画しているところで、また、演劇などができるホールも計画しているところです。

小崎：京都市立芸大の移転先のすぐ近くに、先週「THEATRE E9 KYOTO」もオープンしました。この連携も期待できますね。

先ほどこの講演が始まる前に皆さんのお手元にある文化庁移転の漫画の小冊子を見ていましたが、途中で京都の素晴らしい点を書いてあります。ほとんどが伝統について書かれた冊子ですが、みなさんご存知のとおり、実は京都は常に新しいものを生み出してきたところだ

と思います。ずっと都だったので当然ですが、都が東京に移った後でも、京都には前衛的と言っていい人たちが、どのジャンルにもいたし、今もいるわけですね。これは京都がもっとアピールしていいポイントです。そのアピールを十全たるものにするためには、常にアート展を開催している場所があると嬉しいですね。

金島:そうですね。今がチャンスといえますか、良いタイミングです。京都駅の周辺がいろんな意味で見直されているので、この機会は今まで話題になった海外の都市と比べても、面白い発展が期待できるのではないかと思います。例えば、私は京都に来る前に中国にいましたが、北京も上海も台北も香港も、とにかく一等地で美術が見られる場所を作るということを意識しています。ですので、今が京都も良いタイミングではないでしょうか。

金氏:アーティストランの場所ももっとできてくる気がします。

小崎:できそうですね。アーティストランというのは文字どおり、アーティストが運営している場所のことです。通常はオルタナティブ、つまり主流から距離を置いた自立した空間になることが多いのですが、往々にしてそういう場所から新しい動きが生まれてくる。その意味では、大切にしておきたいところです。

金氏:京都では、演劇の方がどちらかというに進んでいるということもあるのかもしれませんが。京都芸術センターもとても良い施設ですが、どちらかというと、やはり演劇の方がメインになっていますし、先ほども話題になった、KYOTO EXPERIMENT の存在もすごく大きいと思います。ロームシアターができたことでそこを拠点にしていることもありますが、毎年コンスタント

に、しかも大規模で行われている。良い作品を海外からも連れてくるし、フェスティバル自体が新しく作っている作品も常にある。あの存在は演劇だけではなく、他のジャンルにも、京都の美術アーティストにも、大きな影響を与えていると思います。

小崎:それに関連して言うと、世界的に今、舞台芸術は本当に面白いことになっています。舞台芸術のファンと現代アートのファンがだんだんクロスし始めているということが言えると思います。金氏さんもその典型例で、非常にいいことです。一方で問題もあります。特にヨーロッパ以外、アメリカにも多いかもしれませんが、実は現代アートの要素がある演劇なりダンスなりにちりばめられているのに、そのことが観ている側に全くわからないということです。それは逆もあり得ます。つまり、アートの中に演劇的なものが潜められているけれど、アートファンがものすごいアートオタクになってしまっていて、それ以外のジャンルに目を向けなくなっているということが言えると思います。これは本当にもったいない。いろいろなジャンル横断があることによって、ある1つのパフォーマンスなり展覧会なりが、1粒で5度おいしいみたいになるのですが、そこが意外に知られていない。

私はジャーナリストでもあり教師でもあるので、自己批判もしなければならない点ですが、ジャーナリズムや大学教育がその責を担うべきかもしれません。とにかくそこが少しもったいない気がしますね。金氏さんの場合でも、アート展もやるし、演劇作品も作るので、よく批評が出ます。でも、片側からしか見ない批評の方が圧倒的に多いですね。

金氏:本当にそうですね。そういう意味でも、KYOTO EXPERIMENT では特に美術と演劇という

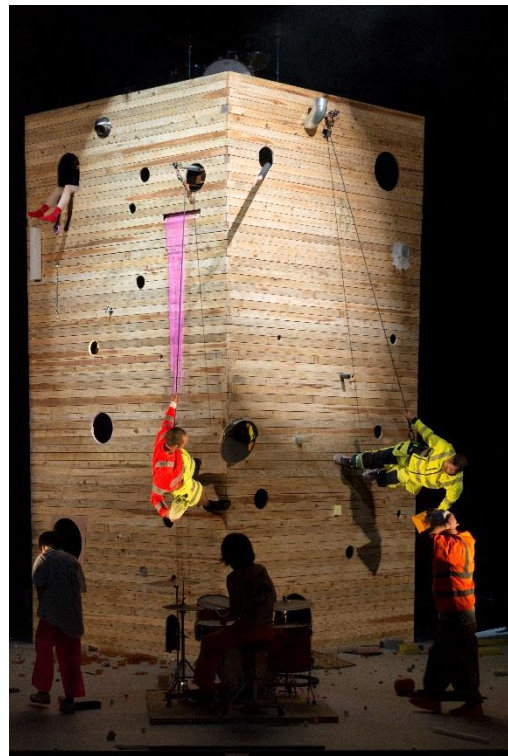
のがあてはまりますが、ミックスをととても意識的にやっています。そこから展開していくことが今後出てくるのかもしれませんが。

私が最初に KYOTO EXPERIMENT に参加したのが 2014 年です。そのときは展覧会をやって下さいというオーダーでしたが、展覧会場の中でパフォーマンスをいくつかやりました。本当に自由に、演劇の文脈を使いながら美術作品を作らせてもらいました。とてもそこから影響を受けたなと思います。

小崎：演劇の世界では、世界中で大変人気がある「チェルフィッチュ」という劇団があります。金氏さんは、その劇団を率いている岡田利規さんに依頼されて、チェルフィッチュ作品の舞台美術を担当された。それが初めての舞台との関わりですか。

金氏：はい、舞台と関わったのはそれが初めてです。その後、小崎さんプロデュースの「ARICA」という劇団の舞台美術をやらせていただきました。

そして、ついに 2017 年に KYOTO EXPERIMENT で自分の演劇作品を作ることになったわけです。ロームシアターのサウスホールを使いました。これは演劇作品ではありますが、私がやったことはあまりありません。ステージ上に大きな舞台美術として、穴がたくさん空いている高さ 6m の大きな箱をデザインしました。実際に建てたのは、dot architects という建築チームです。



金島：この作品自体はかなり前に構想されていますよね。

金氏：そうですね。このアイディア自体や建物の形は、前に描いたドローイングやアニメ作品から来ています。これを 7 セットくらい作って建てて、京都や東京のいろんなアーティストを呼んできて、これを使って何かやってくださいというオーダーをしました。先ほど話に出た岡田利規さんにテキストを書いてもらって演劇をやったり、「contact Gonzo」というグループにこれを使ったパフォーマンスをやってもらったり、ミュージシャンのアラキマサノリさんや、京都で活動しているミュージシャン・アーティストの小松千倫さんにこの建物を使って演奏してもらったりしました。

特徴的だったのが、これには演劇が専門ではない人も混ざっていることです。1 人が音楽を作るシーンがあったとしたら、その周りでその場面に出ない人がみんなで観ている。または裏方としても働く。例えばミュージシャンが、ある場面では俳優として人のシーンに出ないと

いけなくて、俳優として出ない時は裏で大道具を運ぶ仕事をする。このように役割がどんどん入れ替わっていったって、自分が得意なことも不得意なこともいろいろやらないと成立しないような作品でした。

小崎: 金氏さんも何か運んでおられましたよね。

金氏: そうです (笑)。私もただ周りでウロウロしていただけなのですが。

このタワーを動かすために、中にいろんな人が入っています。大体は、うちの学生を集めて出演してもらっています。実は中にいる人が主役で、ダンサーとして中で華やかな衣装を着て、いろいろな裏方の仕事を、そして、外にいる人が作業着を着て演技をしているという作品でした。

小崎: いっぱい空いている穴からいろんなものが出てきて、それだけでも相当面白かった。

金島: この作品は巡回するのでしょうか。

金氏: KYOTO EXPERIMENT での公演後、六本木アートナイトで一度公演しました。その後ですが、今いろいろ検討しています。世界ツアーにも出たいなと思っていて、今準備をしているところです。例えばこれだけを持って行って、現地のアーティストとコラボレーションすることもできるだろうし、そういう間に入るものとして機能するのではないかと考えています。

小崎: 主役であり、媒体でもあり、ですね。

金氏: そうですね。これは全て崇仁小学校で制作しました。崇仁学区は、京都市立芸大の移転先ですが、移転するまではその小学校をいろんなアーティストに貸出しして、制作場所になって

います。体育館では大きい作品も作れます。そこで生まれた作品もたくさんあります。そういう役割を大学が移転した後も担えたら面白いなと思います。

ただ、そのような自由な場所を一から作ることは難しいですね。例えば、小学校の跡地だと、いろんな人が入ってきて新しい創造するのに役立ちますが、そういう場所をゼロから作るとなると結構難しいです。その点が設計の会議でも難しいなと感じているところです。

小崎: でも、崇仁小学校が1つあっただけでも恵まれているなと思います。京都市立芸大とあのエリアのマッチングは素晴らしいです。

金島: 制作的な観点だとどうですか。

金氏: とてもやりやすいと思いますね。建物としてもスペースとしても可能性がありまして、常にいろんなアーティストが周りにいるということが大きいです。例えば、自分はこのようにことしてみたいけれど、その技術がないという時にすぐ聞ける人が周りにたくさんいる。ここは音楽が必要だけれど、私は音楽が専門ではないと迷ったとしても、ミュージシャンがすぐ近くにいる。そういう環境がとても良い。何か生まれやすい状況ではないかと思います。

金島: そういう意味では、今年の KYOTOGRAPHIE で京都新聞社を会場とした展示も、今までの金氏さんのコラボレーションなどが生かされていると言えますね。

金氏: この時も京都のミュージシャンや建築家、照明家等、いろいろな人とコラボレーションして作った作品です。会場は、丸太町にある京都新聞社の建物の中にある旧印刷工場です。新聞社の方が今日参加されていますので、もし私の

説明が間違っていたら指摘して欲しいですが（笑）、今は使われていない工場で、ただ何にも転用できないスペースとしてある。広さは、2000 平米くらいあります。改装しようとする、消防法の関係で全館をいじらないといけない。かと言ってそのまま使うにはすごく危険な場所である。

金島：そして、有料のイベントができないのですよね。

金氏：集客するには消防法が引っかかるとか、いろんなことがあります。ですので、この展示も工場見学という名目で無料で入るようにしています（笑）。だからお金は取れない。

小崎：なるほど、そうだったのか。金島さんがキュレーションされたのですよね。

金島：はい、私がキュレーションを担当しました。

小崎：実はキュレーションではなくて、工場見学ツアーガイドだったと。

金島：そうですね（笑）。

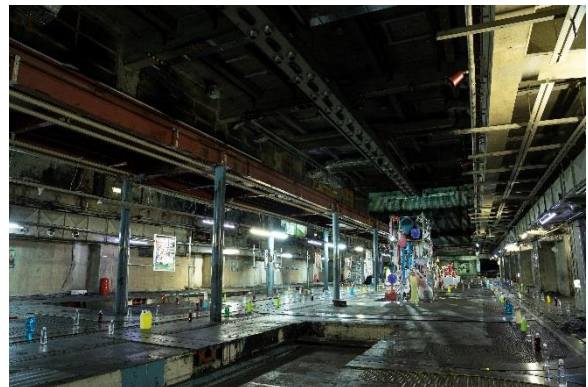
金氏：私があの会場で注目したのは痕跡です。新聞工場としては 40 年くらい動いていた。その痕跡がものすごく残っている。インクが飛び散っていたり、いろんな機械が動いた跡だったり、人の気配も残っている。その痕跡は、実際に今日起こったいろんな出来事を記録した新聞を流通させていく間に、そこからこぼれ落ちたり、行為によって付いたりしたものです。それが強烈に残っていて、もう使われていない空洞の場所だけれども、ものすごく気配がした。

小崎：匂いもすごく残っていましたよね。

金氏：インクの匂いもものすごく残っていました。

金島：あと壁にもインクの跡がありましたね。

金氏：はい。そういった気配を使って、アブストラクトな新聞というか、新聞工場というか、そういうものが作れないかなと考えた展示です。それで、実際に現在動いている久御山の工場にも取材に行きました。新工場は最新型のとても綺麗な工場で、大変整備されてロボットがたくさん動いていた。久御山は、今生きている工場だけれど、あまり人の気配がしない。そのギャップがとても面白くて、それを組み合わせることで新しいフィクション的な状況ができるのではないかと思います。



この展示場所は去年から使われだしたので
すよね。

金島：はい、KYOTOGRAPHIE が昨年から使い始めましたね。

金氏：本当にすごく面白い場所で、これが街中にあるということも強烈だし、これは京都の素晴らしい資源だと思います。世界中のアーティストが、ここに来たら皆ここを使いたがると思う。それをまず京都のアーティストで発信していくと、すごく面白い。今回は KYOTOGRAPHIE

の一環としてやりましたけど、今後単独で企画してやっても成立しそうですね。

金島：はい、この空間だったら成立しますね。

金氏：年に2回くらい、京都新聞社主催で、海外のキュレーターを1人選んできて、1ヶ月間の展示をやったら、大変な名物になると思います。

金島：確かにそうですね。

小崎：もう1回やれと言われたらやりますか。

金氏：いや、どうでしょうか。私は、今後この場を使いたいアーティストが増えると思ったから、思いつくことは全部先にやっておこうと思ってやりきった。難しいですが、それでもやりたいです。実は、最初にこの場所に行った時は、何もしなくても面白いなと思いました。その意味では最初はやる気が出なかった。場所の力が強すぎて、どうしようと思ったわけです。

金島：空間も大きいですね。

金氏：素晴らしい場所でした。今後も相当な可能性があると思います。

金島：これまで金氏さんが制作してきたものや環境が、あの場所で1つに結ばれたような感覚がありました。

金氏：彫刻の作り方と演劇の経験と全部使った感じでした。

金島：小崎さん、今日のトークは文化庁移転もテーマですが、それに関して何かありますか。

小崎：今日は、おそらく文化庁の方もいらっしやっていますよね。でしたら、いろいろと注文をつけさせていただこうかなと思っていたところですよ。

会場：(笑)

金島：ぜひぜひ。

小崎：まず、アートはなぜ必要なのか。ということを商売柄よく聞かれます。なかなか難しい設問です。極論すれば、アートなんて要らない。人間が生きていくためにアートが必要かと言ったら、私の知っている人に無ければ死ぬと話す人もいますが、普通は要りません。ただ、楽しく豊かに生きるためにはやっぱり要るだろうと思います。

事前に少し調べたら、日本国政府がなぜアートが必要か、ちゃんと答えていました。「文化芸術の振興に関する基本的な方針」というのを平成14年に閣議決定しています。その中には5つ書いてあります。

「(1)人間が人間らしく生きるための糧」。なるほど。

「(2)共に生きる社会の基盤の形成」。そうだなと思いました。

そして「(3)質の高い経済活動の実現」。これには、私は少し疑問があります。文化芸術と経済活動は相容れない気もします。

「(4)人類の真の発展への貢献」。大きく出たなと思いますが、まあそうかな。

「(5)世界平和の礎」。これも大きく出ていますが、たぶんそうですね。

金氏さんはアーティストとして大変活躍されていて、国際展にも出展されていますし、個展もいろんな国でなさっています。だから一番身をもって知っていると思いますが、アーティストが海外に出て何が良いか、あるいは海外の

アーティストが日本に来て、芸術祭に参加して何が良いか。もちろん、作品が発表されて理解されれば良いことなのでしょうけれど、それと同じように、知り合いができて仲良くなるということだと思います。人はやはり、知り合いになると相手の国のことをリアルに考える。今の戦争というのは、遠くからボタン1つでミサイルを飛ばして…パンッとなる。レーダーで見えて、「はい、ミッション終了」となります。でも、その「パンッ」の中で、何千人の人が死んでいる。全くリアルに感じられないですね。逆に言うと、人間はそんなに簡単に人を殺せないのです、やはり戦争はリアルでないからこそできる。つまり、リアルな人間の付き合いをすれば、好き好んだ相手のいる国や関連のある場所に爆弾落とそうなんていう発想は消えるのではないかと。話が少し大げさかもしれませんが、実際にアートはそういうことに役立っているのではないかと思います。

そして、文化庁というのは何をするとところかも調べてきました。文化庁の基本の「き」は何かというと、まさに「文化芸術基本法」という法律が、先ほどの閣議決定とはまた別に定めています。

この法律は2001年（平成13年）に制定されて、2017年（平成29年）に改正されました。最初は「文化芸術振興基本法」という名称でしたが、長いので要所だけ読ませてもらいます。

前文に「文化芸術を創造し、享受し、文化的な環境の中で生きる喜びを見出すことは、人々の変わらない願いである。また、文化芸術は、人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界の平和に寄与するものである。」とあります。趣旨は先ほどと同じですが、それでもその前文の中で、私が一番重要だと思ったの

が、前文の終わりの方です。「我が国の文化芸術の振興を図るためには、」この後が重要ですが「文化芸術の礎たる表現の自由の重要性を深く認識し、文化芸術活動を行う者の自主性を尊重することを旨とする」とあります。ここが重要なところで、1つは「表現の自由の重要性」というところですね。もう1つは「文化芸術活動を行う者の自主性を尊重する」。この2つさえ守れば、文化行政というのはそれで良いのではないかと思います。

どういうことかと言うと、皆さんご存じかどうか分かりませんが、最近、表現の自由の問題が世界的にとっても危ういことになっています。実は、日本も例外ではありません。忖度する風土の中で、声をあげる人があまりいない。海外のアーティストは元気のある人が多くて、それぞれの国で表現の自由に関わる問題が起こると、アーティスト以外にも、アートに関わる人、皆がストライキやデモをやったりします。日本人は悲しいかな、皆、従順ですね。

先ほどの言葉で言うと知性もないけれど、とにかく野生がないから、なんとなく忖度して従ってしまう。当然、日本は民主主義国家ですし、表現の自由は憲法で保障されていますから、原理的には検閲もありません。検閲というのは何かというと公権力による表現の制約です。国家権力が何かを取り締まるということはほとんどの場合ない。時々ありますが、それはかなり例外的です。

ただ、今この時代にアーティストが直面しているのが、まさに「忖度」なのです。「自主規制」と言うこともあります。英語で何と言うかというと、「セルフセンサーシップ」です。セルフとは自分、センサーシップというのは検閲です。つまり「自己検閲」なのです。通常の検閲というのは公権力がやることですが、公権力ではなく、アーティストが自らやってしまうというのはどう考えてもおかしなこと。もっと正

確に言うと、アーティストのほかにも、美術館の館長、担当キュレーター、ギャラリスト、アートフェスティバルのディレクターや担当スタッフといったアート関係者が、自己検閲をするのは絶対におかしい。表現の自由と対比して言われることで例えば、「ヘイトスピーチも表現の自由として認めるか」と言えば、それは認めません。でもそういうことではなく、少し前だったら誰も規制しなかったようなことが、できなくなっている実態がある。私はジャーナリストとして、自分が知ったことはなるべく書くようにしていますが、このような時こそ、文化庁の出番ではないのか。なぜなら文化芸術基本法に書いてあるからです。やらないでどうするという話です。ラーメン屋がラーメン出さないでどうする、みたいなね。

会場：(笑)

小崎：そこからやって欲しいんだというのが1つです。

金島：その状況は小崎さんの本にも触れられていますよね。

小崎：はい。そういう事例が実際に美術館であります。何か理不尽なことがあったら、まずは当然、アーティストが戦うべきだし、戦って欲しいですけど、そういう気持ち、忸度しない機運を醸成するためにも、文化庁にも一肌脱いでいただければなと非常に思います。

今どちらかと言うと前向きなことよりもネガティブなことを無くそうと言う形になっていますが、もう1つ、文化庁がこれまでやってきたことの中で、私が非常に良いなと思っていることも、公平を期すために言っておきます。

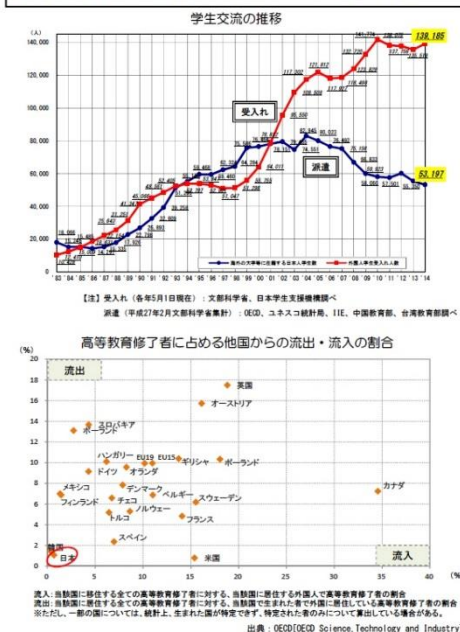
文化庁に「新進芸術家の海外研修制度」という制度があります。これは各ジャンルの比較的

若い表現者を選んで、基本的には本人の希望に応じて、様々な国へ派遣する制度です。派遣期間は、数十日から、最長3年です。それを利用しているアーティストもたくさんいます。これはとても素晴らしい。日本のアーティストは日本にいる限り、海外のことをあまり知りません。アートシーンもそうですし、国際社会で何が起きているかも知らない。これは大きな問題です。国際社会のことをなかなか報道しないマスメディアや、教育全般に起因することもきっとあるでしょう。ただ、そのような大きなこととは別に、小さな努力、つまりアーティストを1人海外に送る。血税が何百万も使われているので小さな努力と言えないかもしれませんが、そのことによってアーティストのものの見方が変わって、ひいては彼あるいは彼女の作品という形で具体化するわけですね。それを発表して我々が見ることによって我々も変わる。その意味では大変に意味のあることだと思います。

この背景にあるのは、最近、特に若い人が内向きだと言われていることです。これは文科省のデータですが、アートに限らず学生の海外交流がどうか、つまり留学生がどんな状態にあるかというデータです。

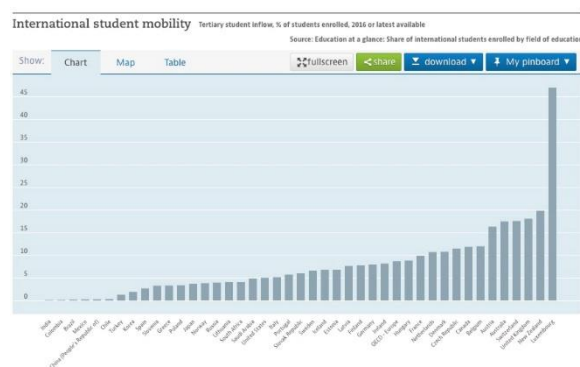
40. 学生の海外交流

外国人留学生の受入れ数は2010年の14.2万人をピークに減少傾向にあったが、2014年に13.9万人まで回復している。また、海外留学する日本人学生数は、2004年の8.3万人をピークに減少し2009年に6万人を下回ったが、2012年には6万人を上回った。また、高等教育修了者に占める他国からの流出・流入の割合は他国と比べ低水準。



日本人はだんだん内向きになって留学生が減っているという議論があります。一方で、実は減っていない、むしろ増えているという見方がありますが、それは短期留学や、高等教育以下、つまり高校生・中学生を加えた場合です。このグラフでは、赤い方が受け入れ（海外から来る人）で、青い方が日本から外に行く人です。これを見ると、やはりピークから漸減しています。

こちらがさらにすごいグラフですが、高等教育以上の学生の流出・流入の割合で、日本と韓国は流入も流出も少ないですね。私は、若い頃は海外に行きたくてしょうがなく、バイトしたり親に補助してもらったりして、留学しました。そういう思いが最近の若い人にはあまりないのかなと思います。



これは OECD が調べたデータです。

「International Student Mobility」すなわち、国際的に学生たちがどのように動いているかというデータです。縦軸はパーセンテージでどれくらい自国以外の国に行っているかということを示しています。突出して多いのはルクセンブルクですが、これは実は当然で、ルクセンブルクは世界で一番豊かな国なんです。しかも小国で、一歩外に出るとベルギー・フランス・ドイツなど、とにかく 30 分車を走らせれば外国ですから、学生が国外に出るのは必然的であるとさえ言える。

それを除いてこのデータを見ていくと、上位 5 カ国（15～20%が海外留学している国）はニュージーランド・イギリス・スイス・オースト

リア・オーストリア。この国の人たちは海外で学ぶことに非常に熱心であると言えます。続くグループ（5～15%が海外留学している国）は少し差が大きいですが、ベルギー・カナダ・チェコ・デンマーク・オランダです。これは当然、国によって諸事情があると思います。お金持ちの国もあれば、お金がない国もある。金がないからこそ外に行って稼ごうということもあるでしょう。ニュージーランドやオセアニアの国は端的に遠いからでしょうね。移民国家ですから、最初に来たマジョリティーは白人で、ヨーロッパに対して大きな憧れとコンプレックスが同時にあります。そうすると、自分も含めてなるべく自分の血筋を故郷であるヨーロッパへ行かせたい、あるいは最近であれば近い外国である ASEAN 諸国や日本に行かせたい、それでこういう数字が出ているのだろーと思います。

日本がどこにあるかという、下から 13 番目です。少し悲しくないですか。もう少し留学が増えないと何にも変わらない。特に現代アートというのは、定義上インターナショナルなものです。それぞれの国・地域・文化によって特徴がありますが、ルールは国際的です。その点で言うと、サッカーと同じです。それなのに一国の中だけでサッカーをやっている状態です。今年の大河ドラマの「いだてん」は、いかに 100 年前の日本がスポーツに関して井の中の蛙だったかを描いています。古式泳法を続けていた 100 年前の日本人が、「我々は水泳王国だ。絶対金メダルだ」と思ってオリンピックに行くと、クロールに敵わなくて惨敗するところから始まりますが、同じようなことがアートに関しても当てはまると思います。もしかすると、同じことはアートに限らず、あらゆる学術・芸術に当てはまるかもしれません。グローバリゼーションの流れと別個か、一緒なのかは分かりませんが、国際ルールから外れているという状態

は、決して良いこととは思えません。ですから、文化庁には是非、海外に新進芸術家を送る取り組みを続けていただきたい。もっと言えば、年間予算 1,000 億円程度と書いてありましたが、もっとお金をゲットして、もっと多くの新進芸術家を海外に送る取り組みを続けていただきたいと思います。

そして、これは案外皆さんに知られていないかもしれませんが、文化庁も京都市も、もっと東アジアに特化しても良いなという気がします。

日本の芸術文化に関する国際交流を担当している機関は国レベルで 2 つあります。1 つはもちろん、文化庁。もう 1 つは外務省の下にある国際交流基金という団体です。その名のとおり、国際交流を促進する団体で、外務省の外郭組織ですから活動資金は全て税金で賄われています。フランスで言えばアンステティテュ・フランセ、ドイツで言えばゲーテ・インスティトゥート、イギリスで言えばブリティッシュ・カウンシルのような機関です。

この組織は、2014 年に大きな方針転換を行いました。芸術文化交流を、東南アジアに特化して行うことにしました。これには非常に単純な理由があって、2010 年以降、尖閣諸島の問題、あるいは竹島の問題のような、不幸にして中国・韓国との間に様々な争いが起こりました。そこで第二次安倍内閣がそれまでの方針を変えて、中国・韓国は仮想敵国とまでは言わないけれども、彼らと対抗するために、両国に使っていたお金を ASEAN に振り向けることにしたわけです。

実際に、国際交流基金のアジアセンターは、今は東南アジアとの交流しか行っていません。これは悪いことばかりではなく、我々が今までよく知らなかった ASEAN の国々と交流ができて、彼らのアートを知ることができています。例えば、先ほど名前があがった岡田利規さんは、

東京でタイの人たちと一緒に芝居を作っていて、非常に好評です。でも残念なことに、国際交流基金のお金は東アジアにはほとんど行かないようになってしまいました。

でも今のところ、文化庁にはそういう縛りはありません。実際に、2014 年以前に「東アジア文化都市」というイベントが国レベルで決められていて、それはきちんと行われています。2017 年には京都が「東アジア文化都市」の日本の都市に選ばれて、様々な取組がなされたのは、皆さんご存知のとおりです。

今、相対的に見て、東アジアとの文化的交流が以前よりも減っている。これを国際交流基金が担えないのだとしたら、文化庁はそこに時間、お金、人を割いてもいいのではないかというのが私の個人的な意見です。当然、どこかに特化することは、1 番上の幹部から指令が来ない限りなかなか難しい訳ですが、まず親しくなるべきは、実際に近い国がいいのではないか。台湾・韓国・中国には、特に漢字という文化があるということを考えると、近くにある国と仲良くして、歴史的な問題を乗り越えていく努力をしてもいいと思います。

また、日本に関するもう少しまともな展覧会の企画を国内外でできないものかと思っています。と言うのは、昨年、フランスと日本が交流 160 周年だったのを記念して「ジャポニスム 2018」という企画がフランスで行われました。全部は見られませんでした。去年の夏にそのうちいくつかを見てきました。その中に「日本の美意識を探る」というテーマで美術を中心とした展示がありました。予算のせいなのかもしれませんが、なんと 25 作家しか選ばれていません。それで日本の美術史を網羅するのは無理ですよね。まず、縄文土器がドンとある。それは結構なことですが、縄文時代の次は、弥生以降は全部すっ飛ばして、王朝文化なし、北山文化なし、東山文化も桃山文化もなし。したがっ

て、「もののあはれ」も侘び寂びもなし。そして江戸時代の円空仏にいつている。これは飛ばし過ぎですよ。

金氏：見た目は近いですけど（苦笑）。

小崎：確かに、見た目は少し近いですが（苦笑）。あまりに呆れたので、これはいつか書こうと思っています。

それはさておき、せっかくやるのであれば、きちんとした日本を考えた上で、京都としてそれを見せることがあってもいいかなと思います。その時に東アジアにネットワークが築けていれば、とてもいい展示ができると思います。皆さんご存知のとおり、今京都には観光客がいっぱい来ているから、京都という街に魅力があることは分かっています。それをさらに広めていくためには、中国や韓国といった近くの人たちと共同して、いろいろやっていくのは、悪いことではないと思います。

ところで、金氏は中国・韓国での展示経験や、あるいはロンドンの RCA に留学経験もありますよね。

金氏：はい。交換留学で行きました。

小崎：海外経験は重要ですよ。



金氏：そうですね。私は、学生のうちに海外に行けたのはよかったなと思います。

今、大学で国際交流の担当をしていますが、海外に行こうという学生が減っていて、毎回定員割れを起こしていて問題になっています。

小崎：もったいない！大学が留学費用を援助してくれるのではないですか。

金氏：はい。大学がサポートしてくれます。

金島：金氏が学生の時はどうでしたか。私が大学生だった時も、留学は人気でした。

金氏：私が学生だった当時、倍率がとても高かったです。留学先も、イギリス、カナダ、フランスくらいでしたが、今は提携校も増えて、中国、韓国、ポーランド、オーストラリア、フィンランドなどがあります。それでも希望者がいない。

小崎：やはり野生が足りない。

金氏：きつくないのでしょうか。

金島：私も中国で仕事をしていて、仕事を一緒にしているアーティストが京都に来ることがあります。例えば、一緒に奈良まで足を運んでお寺を見ると、彼らがまず言うのは「奈良は中国だ」と。唐の時代のものが日本の中でちゃんと守られて残っている。それからお茶文化に触れると、一番大切にされていたのは中国や韓国からきた品物であり、日本そのものというのも元々は辿って行くと中国や韓国に行き着く。日本は日本と思いがちなものも、交流することによって解きほぐされるし、そこでまた歴史がつながって行く、そういった認識になるなと感じました。

実際に中国のアーティストも日本の美術を調べた後に、自分の作品に生かしているアーティストや東アジアを広く捉えながら活動されているアーティストもいます。そういった意味で美術や文化が、政治以外の部分で繋がると非常に感じます。

金氏：私も早い段階から、中国や韓国で活動を始め、展覧会の機会を得ることができました。特に中国では、滞在制作もしましたので、今も何年かに一度、現地で展覧会をしています。中国での受け入れられ方は本当にどんどん変わっていていますし、現代美術に対する認識もレベルが上がっていているのを実感します。その勢いは、日本から見ていると恐ろしいスピードです。日本の進み方では全然追いつけない。

金島：そうですね。

金氏：私が中国・韓国に最初に行き始めたのが7、8年前です。その頃はさほど、アジアの作家に興味になさそうでした。中国だったら中国の若い作家にしか興味がない、韓国でも自分の国の作家にしか興味がない。しかし、現在では日本の作家にもとても興味があって、先方を訪れても受け入れられ方がとても変わってきている。

一方で日本に置き換えてみると、例えば中国・韓国の若い作家にどれだけ日本が注目しているかという、結構まずいなと思う部分もあります。もちろん、日本の作家をしっかりサポートし、興味を持っているということでもありますが、海外の作家をどれだけきちんと受け入れ、興味を持っているかといわれると、かなり怪しいところがありますね。

金島：金氏さんのお話ですが、中国・韓国では

おそらく最初の頃は興味がなかった。その後で展覧会の規模やお金が大きくなって、今はとても本質的な部分に興味を持っているといえます。

実際に海外に行くと、日本人留学生はほとんどいない。海外の大学では、在学しているのは中国人の留学生と、韓国人の留学生とベトナム人の留学生です。本当に日本の学生も若い人もどんどん減っています。

私は大学生の時にフィンランドに行っていましたが、その時は日本のブランド、ソニーやトヨタ、それ以外にもいろいろな企業が現地にありました。日本の経済をはじめ、何かしら日本の存在を気付かせるようでしたが、今の欧米の人は日本の企業をぱっと思いつかないのではないかと。思いついたとしても、それは中国の企業や韓国の企業です。海外には、もう若い人もいないし、企業もないし、日本の存在が世界的に本当に忘れ去られていっている。私たちが大学生の頃はまだそこまでではありませんでしたが、この平成の20年間で大きく変わってしまっていると肌で感じました。

小崎：この話は、アートに限った話ではなくて、皆で本当に真剣に考える必要があると私は思いますね。

10数年前、アート雑誌をやっている時に韓国特集を企画して取材に行きました。その時に、文字をテーマにした展覧会を見ました。韓国ですから文字は当然ハングルで、ハングルを使った点描画作品がありました。ユ・スンホというアーティストですが、同様のことを漢字でやったら面白いのではないかと思います。

韓国は、今はハングル中心になっていますが、もともとは漢字文化圏です。これは華人の多いベトナムも同様ですよ。つまり潜在的にと言いますか、実際に漢字を使える人が多い。漢字をテーマにした展覧会の企画を行えば、東アジ

アでとりあえず分かり合えそうですし、こういったことを東アジアでやることに非常に意味があると思います。

金島：そうですね。文化的にもそうですし、また経済も当てはまります。以前は、背伸びして頑張って欧米のアートフェアなど、欧米に何かを見せていかないと世界的な地位を作れてこなかったのですが、現在は、私たちの身近にマーケットができています。東アジアの人々との仕事に通じて、それがもう世界に広がっていく。以前とは違う広がり、東アジアだけで成立する時代になってきていると思います。

小崎：その話に関連して、実は京都市のウェブサイトから非常にいいテキストがあったので、ダウンロードしてきました。「世界文化自由都市宣言」というものです。これは昭和 53 年の宣言ですから何年前ですかね。

金島：私が生まれた年です。41 年前ですね。

小崎：書き出しがすごくて、とてもカッコいいですよ。「都市は、理想を必要とする。」。

少し飛ばして三段落目の冒頭を読み上げますと、「京都は古い文化遺産と美しい自然景観を保持してきた千年の都であるが、今日においては、ただ過去の栄光のみを誇り、孤立して生きるべきではない。広く世界と文化的に交わることによって、優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市でなければならない。われわれは、京都を世界文化交流の中心にすべきである。」。

とても素晴らしいと思いますが、これをやるのであれば、やはり現代アート、現代芸術を中心にやらないと永久に新しい文化都市であり続けられないですね。ここがおそらく文化庁

と京都市が手を携えてやっていけることだと思います。



金島：そうですね。ありがとうございます。

ここで会場からの質問を受けたいと思いますが、どなたかご質問がある方はいらっしゃいますか。

質問者：質問は、一言でいうとお金の話です。例えば、学生がなぜ海外に出ていかないのかという話がありましたが、お金がないからではないか。先生方は、なぜ国際的な活動ができてなのか、金銭面のことを教えてください。

金氏：アーティストの個々の事情によりますので答えづらいところです。私の場合は大学で教えているというのもありますし、作品を売っていることもあります。また、文化庁等の助成金を活用することもあります。

金島：私が最初に留学したのは大学生の夏休みでした。夏休みは2か月あったので、1か月バイトして、1か月バックパックで旅行しました。今よりも時給も安かったですし、今よりも飛行機のチケットも高かったですが、そうやってチャレンジする人が多かったかなという印象を持っています。

小崎：お金の話は本当に重要だと思います。

一般論で言うと、アーティストが生きていく道で理想的とされているのが、1つはマーケットで自分の作品が売れることですね。絵を描く、それが売れる。次の絵を描く、またそれが売れる、それで食べていくというやり方です。現在、これはなかなか難しくなっています。一握りのスーパースターがよく売れている。それも今、マーケットが非常にクレイジーな状況ですから、何千万、何億というとてもない値段で売れて、他のアーティストはほとんど売れない。

世界中にアーティストがいますが、何をやって生計を立てているかという多くは副業ですね。また、これは国によりますが、金氏さんが説明してくれたように、助成金の手厚い国ではそれで生活している人たちもいます。他にも、最初にご説明したアーティスト・イン・レジデンス、いわゆる滞在制作で生活している人もいます。制度は色々ありますが、色々な国に滞在する際に、滞在費等を持ってくれるところがあります。私の知り合いのアーティストには、20年程、ずっとアーティスト・イン・レジデンスで、転々としながら生活している人もいます。

しかし、これがいい状態かと言うと、あまり良くないですね。では、これを変えるためにはどうしたらいいか。

色々な方法がありますが、冒頭にも話した文化芸術の振興に関する基本的な方針の3番目、「質の高い経済活動にする」というものがあります。国として、なぜこういうことを考えるかという理由は2つあるかと思います。1つは当然ですが、そういう経済的に苦しいアーティスト達の生活を少しでも良くする。もう1つは国を良くするということです。国を良くするというのは、例えば文化観光によって収入を上げる、外貨を稼ぐ。それと同時に国のイメージも上がる。例えば、フランス等は大変上手くいっています。日本はなかなか上手くいないので、この方針を考えたのだと思います。

これはある意味、当然の流れかと思いますが、私は経済の専門家ではなくて文化芸術の側に身を置いているので、とても違和感があります。

アーティストは、そもそもアートで食べていこうと思ってやっていないのではないかな。もっと素朴な、何かを表現したいという、ほとんど子どもが遊びたいというのと同じような欲求があって、そこからすべてが始まっているのではないかな。もちろん、活動を続けていくには、実際に生活していかなければなりません。その最初の純粋な思いはだんだんと鈍っていったり、汚れていったりしますが、でもやはりアーティストの思いをまずは尊重すべきだと思います。

売れるのは二番目でいい。二番目というのは、売れることが一番の目的じゃなくていいということです。それを何とかしようと、経済政策の中に位置づけて、あまりに急ぎすぎた政策をすると失敗することになります。京都でも今まで何度か国際的なアートフェアが行われましたが、ほとんどうまくいっていません。大抵の場合、「京都人はケチやからな〜」と一言で片付けられてしまいますが、それは違うと思います。私は東京出身ですが、妻が京都人で、まあケチだとも思います。しかし、ケチというよりは「合理的」なんですね。京都人に限らないかもしれませんが、無駄なお金を使わない。現代アートは、一言で言うと訳がわからない。訳がわからないものを人は買わない。訳が分かってから買うと思います。「これはラーメンだ、しかも旨そうだ」、だから買うわけで、見て「え、これ何？そもそも食べ物？」みたいなものには普通金を払わない。それを無理やり買わせるのは間違っていると思います。

何を言いたいかというと、今の状況を変えるには、やはりショートタームで物を考えてもいいことがない。つまり、分からないまま買って、それで結局、何か良くないなと思ったら、捨て

られるかもしれない。そうではなく、ちゃんと分かった上で物を買わなければ意味がない。

それは、いろんな意味での教育ですよ。学校教育でもあり、社会教育でもあり、マスメディアの役割も重要だと思います。そういったことが全て相まって、何人かの人から「そうか、現代アートってこういうところがおもしろいのか。アーティストって変な人たちだけど、社会にこういう人がいると楽しいよね。」という意見が出てくると、そこからお金が出てくる。

自分の本の中で書いたのが「芸術家というのは方外にある」ということです。「法外」ではなく、方向・方角の「方」ですね。昔の言葉で、いわゆるマジョリティーではない、マイノリティーに属するような人のことです。昔は、お坊さんをはじめ宗教家、儒者、医師などが当てはまりました。ある種のフリーランスで、聖なるものを担った人たちが「方外」と見なされていたわけです。現代アートではいわゆるアーティスト神話が否定され、「アーティスト＝天才ではない」という考え方が基本的ですが、それでもやはり我々が生きていく時に、金氏さんのようなアーティスト、あえて言いますけど「変人」が変なことをやっていると「あ、明日も生きていけるな」と思う時があります。私が作品を買う時は、買うというよりも、気持ちとしてはお布施ですね。お布施のような気持ちでアーティストを支える社会というのはとても健全な社会であるような気がします。

金氏：小崎さんの話を聞いて、やはりお金とアーティストの問題は非常に重要だと改めて思いました。どう考えても日本には、アーティストが生きていけるような価値観や仕組みがありません。

例えば、どこかで展覧会をやると言っても制作費はない、プランニング料なんてもちろんない。アイディアに対して対価ありませんし、

下手をすれば、交通費も宿泊費も出ません。ただ、「場所はタダで使っていいですよ」という言い方をされることもあります。しかも、美術館で個展を開いた際に、一般の人から「あの美術館は、いくらで借りたのですか」と聞かれたことがあります。一般の人は、「やらせてもらう」という認識なのです。美術はアーティストが好きでやっていて、それを発表させてもらっているという認識が結構強い。

小中高の美術教育や美術大学にも当てはまりますが、美術の教育では、作ることを教える一方で観ることも教えているはずですが、本当は、作ることと観ることが、もう少し一体化してくると、多くの人の認識も変わってくるのかもしれませんが。先日、東大で宇佐美圭司の絵が捨てられたというニュースがありましたが、本当に信じられない。あの絵がすごく素晴らしい、名作だから信じられないのではなく、あんなに大きな立派な絵を捨てるという感覚が分からない。子どもが描いた絵でさえ、いくら邪魔でも家では捨てられないですよ。なのに、東大という大学が平気で捨ててしまう。まだまだ、日本はそういう感じなのかと思いました。

そういう意味では、京都からアーティストの生きていく術だったり、アーティストに対する価値の見出し方だったり、新しいものを発信していくチャンスがあるのかなと思っています。

先ほどから、京都にはギャラリーが少ないという話が出ていますが、それはチャンスだと捉えられます。ギャラリーの仕組みは、欧米から来ているものですが、盲目的に信じすぎているところがあります。ギャラリーは年間を通じて、多くの作品が売れていくところでしか本当は成立しない仕組みです。アーティストが、ギャラリーを通して作品を売ると、基本的には売上の半分をギャラリーが取る。日本ですと、とても活躍している作家でも、年に2つ、3つ売れても、半分取られていたら手元に何にも残らな

い。制作費もアトリエの維持費も何にも残らず、マイナスなのです。そういったギャラリーの仕組みを盲目的に信じているような状況も厳しいのではないかと思います。ですから、アーティストの在り方やサポートの仕方を京都から発信するチャンスがあると考えています。

質問者：経済界がアートに注目していて、ビジネスの手法にアートや感性を取り入れようとする動きがあります。そういった動きについて、御意見をお聞かせください。

小崎：さっき言った答えに似通ってきますが、順番が逆だと思います。

日本はアートコレクターがあまり多くない国ですが、5本の指に入るとされるコレクターに福武總一郎さんがいます。ベネッセコーポレーションの元会長で、瀬戸内国際芸術祭を始めた方です。瀬戸内海に浮かぶ直島に、30年近く前に安藤忠雄さんという建築家に美術館を建てさせて、自分のコレクションを見せることから始めて、今や有数の観光地になっています。先ほど、外国人がこぞって来るという話をしましたが、特にインテリのヨーロッパ人は、東京か大阪に着いて、京都に来て、それから直島に入るのがゴールデンコースです。

この方の名言に「経済は文化のしもべである」というものがあります。経済がないと世の中は成り立たないので、経済を中心に物考えるのはある意味で当たり前のことです。しかし、実はそうやって経済が上から目線で文化を見るのは、そもそも間違っています。福武さんが言っていることの意味は明快ですが、少し補足すると、つまり文化は本来経済原則とはなじまないものだということです。なじまないがゆえにひどい状況も起こっている。

ニュースで報じられているので、皆さんご存知かもしれませんが、今、世界のアート市場で

は1%の金持ちが、自分たちの財産を増やすため、つまり投資のためにクレイジーな買い物を続けています。一昨年、オークション価格でいきなり50億、100億がついたり、日本でもZOZOTOWNの前澤さんという方が、ジャン・ミシェル・バスキアというストリートアート、グラフィティアートから出発した人の作品を123億円で買ったりした。もちろん、自分のお金をどう使おうと自由だし、お金がまわると社会全体が潤うかもしれない。しかし、やはりこれは違うのではないかという思いを拭い去ることができません。前澤さんはとてもアートがお好きな方で、若い人のサポートもされているそうです。でも、どこか、アートや文化が経済とは違うものだということが体感されていないのではないかと思います。「経済は文化のしもべ」までとは言わないまでも、この2つが違う原理で動いているということを、世の中の人が理解してくれるといいですね。

金島：ありがとうございました。

それではお時間も近づいてまいりました。文化庁の京都移転が控えていますが、文化庁が京都に来ることで期待されることについてお話いただこうと思います。小崎さんは、トークの途中でかなり長く触れていただきましたが、金氏さんも御意見があれば、お願いします。

金氏：先ほど、アーティストだけではなく若い人が海外に行かなくなっているという話がありました。アーティストの側から申し上げると、もちろん海外に行くと刺激もあるし、視野も広がるし、素晴らしいことです。ただ、アーティストに限ると、籠って作っている人でもすごい人はいるかもしれないし、いろいろなやり方があって答えがないものです。

一方、発信する側の人、例えば、キュレーター、ギャラリスト、評論家といった人が少ない

と思います。日本のアーティストを海外に発信できる人、海外の状況ときちんと繋げて語れる人、それこそ経済と繋げる人、そういう人が少ない。そういう人が海外にどんどん出て行くことがあればいいなと思います。

また、京都が文化庁にある意義としては、海外から日本に連れてくる機能がもっとあったらいいと思います。私が、今まで行ったことのあるレジデンスで大変面白かったのが、シンガポールのシンガポール STTI というところや、ヴェネチアのガラスの工房です。その国の特色を活かしながら、世界中の有名なアーティストを連れてきて、独特なレジデンスプログラムをやっていました。海外のものではなくて、京都発信、文化庁発信の京都ならではのレジデンスプログラムがあるととても面白い。皆が来たがる場所としてさらに機能していくのではないかと思います。

金島：ありがとうございます。小崎さん、御意見ございますか。

小崎：では、もう1つ。

文化庁は京都という街と一緒にできることがあるのではないかと思います。言うまでもなく京都という街が素晴らしいのは、例えば明治維新の後に番組小学校を作ったこと。街の方々がお金を出して自分たちの子弟のために、さらには何十年後、100年後のために教育機関を作ろうと、皆でお金を出した。あるいはリヨンの街に西陣から留学生を派遣してジャガード織を学ばせたこと。その副産物として、稲畑勝太郎さんという人が、大学で映画の発明者であるリュミエール兄弟の兄と仲良くなって、映写機とフィルムを持ち帰ってきた。そして、おそらく立誠小学校の横で日本初の映画上映が行われた。そんな副産物もありますよね。国から来た資金もあったかと思いますが、ともあれ、そ

ういう気風がこの街にあります。

ですから、それこそ「アートとは何か」ということを考える機会を文化庁、京都府、京都市と一緒に考える場が作られるといいのではないかと思います。併せて、それがどんどん理解されていけば、タニマチ文化がよみがえる。タニマチというのは大阪の谷町だそうですが、京都にもいわゆるタニマチ文化、サロンが当然あったわけで、そういった気風がもう一度よみがえってくることに私は期待したいですね。

あともう1つ。唐突なようですが、ジェンダーバランスがとても重要だと思います。金氏さんはよくご存じですが、ここ10年で芸術大学の男女構成比が劇的に変わりました。金氏さんが在学中はいかがでしたか。

金氏：私の時で女性と男性が6:4か7:3ぐらいで、女性が既に多かったですね。今では、9:1ぐらいです。

小崎：私が教えている京都造形大も同様です。しかし相変わらず、教えているのはこういうおっさんばかり。全然いいことではないですよ。変えられるなら変えた方がいい。特にトップが女性になるのは大変重要だと思います。その意味では、京都市立芸大は赤松さんという女性がトップなのでいいと思います。アート市場の現場も女性が非常に多いので、文化庁も女性の意見が非常に重要だと思います。

金島：ありがとうございました。それでは、時間になりましたので、トークを終わりにしたいと思います。

これまでも、時代、時代の前衛の表現の積み重ねりが伝統になり、今の京都がある。表現の原理に基づいて、これからの表現について守って支えていただき、文化庁移転がそういう機会になればと思います。例えば京都市立芸大も日

本最古の美大ですし、小学校も京都からできた
ものです。美術や教育というものの最先端を作
って、今でこそ、それが伝統になっていますが、
では、これからの伝統をどう作るかとなると、
最先端で何をしているかということが未来の
伝統になっていくと感じています。

今日は本当に有難うございました。

会場：（拍手）